

報告

高校生に向けた実践 ——SNET 台湾の活動を中心に——

山崎 直也

はじめに

第1節 本シンポジウムのねらい

第2節 SNET 台湾とは

第3節 台湾研究は教育支援から何を得るか

第4節 SNET 台湾の活動

おわりに

(要約)

本稿では、日本台湾学会第23回学術大会で筆者が企画した「台湾を学び、教える—台湾研究の成果をいかに社会に還元するか—」と題する公開シンポジウムが行われるに至った経緯とねらいを説明した上で、台湾研究が今、ソーシャル・アウトリーチを強化することの意義を考え、さらに筆者がSNET台湾の一員として取り組んできた高校生に向けた実践を紹介する。SNET台湾は、急増する台湾修学旅行の教育効果を高めるべく、高校と高校生に対して教育的支援を提供する台湾研究者のプラットフォームとして発足したが、コロナ禍という想像を超えた事態の中で、状況の変化に適応しながら、様々な活動を展開してきた。ここでは、当初段階から計画にあった高校の教育現場への研究者派遣、研究者が作る教育志向の旅行情報サイトの制作といった活動から、台湾修学旅行の休止状況下で新たに手を広げた動画制作等の活動まで、SNET台湾の活動について中間的な総括を試みる。

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大によりオンラインでの開催となった第22回学術大会（2020年5月30・31日）に続き、再度オンラインでの開催となった第23回学術大会（2021年5月29・30日）では、初日にあたる5月29日に「台湾を学び、教える—台湾研究の成果をいかに社会に還元するか—」と題する公開シンポジウムが行われた。基調講演と4本の事例報告からなる第I部の事前収録動画は、VimeoとYouTubeでリアルタイム配信され、動画を視聴した会員・非会員の質問に登壇者がライブで答える第II部は、Cisco Webex Meetingsを使用して行われた。第II部で答え切れなかった質問については、後日、事例報告者の4名と司会者が「延長戦」を収録し、本学会員及びシンポジウムに参加登録した非会員にYouTubeで限定公開された。

本シンポジウムの主題は、端的に言えば「台湾研究のアウトリーチ」であり、これまでの本学会の公開シンポジウムとは若干傾向の異なるものであったが、2019年に就任した松田康博第11期理事長がその就任挨拶の中で、ソーシャル・アウトリーチとグローバル・アウトリーチを学会の三大目標の中に含めていたことを考えれば、学会として時宜を得たテーマであった¹。なお、松田理事長は、2021年に再任された際にも、再度この点を強調している²。また、研究者が蓄積した知見をいかに社会に届けるか、当該分野の研究者にとって土台となる知識体系を次世代に伝

える「××学教育」はいかにあるべきかという問題は、台湾研究に限ったものではなく、文理を問わず今日の学術研究全般に共通するものである。

本稿では、第1節で本シンポジウムのねらいを企画責任者の立場から明確にした上で、第2節以降で筆者が代表理事の一人を務める SNET 台湾の活動を中心に、高校生に向けた実践活動について、公開シンポジウム後の動きも含めて紹介したい。

第1節 本シンポジウムのねらい

日本台湾学会では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、2020年5月の第22回学術大会がオンライン開催に移行した。事態はその後も一進一退を繰り返し、2021年5月の第23回学術大会は、当初対面での開催を予定していたが、半年後の感染状況がまったく見通せないという理由により、オンライン開催への転換が2020年12月6日の第11期第4回常任理事会で決定された。公開シンポジウムの企画案も白紙に戻り、常任理事会で代替案が検討されたが、本学会の常任理事で、2018年9月から日本台湾修学旅行支援研究者ネットワーク（SNET 台湾）の共同代表として筆者と共に活動してきた赤松美和子、洪郁如両会員と「台湾を教える」というテーマを提案し、基本的な合意を得た。

斯界の泰斗として大学及び社会教育機関で長年にわたり台湾史教育の最前線におられる国立故宮博物院の呉密察院長を基調講演者、呉院長の薫陶を受け、本学会で理事長も務めた三澤真美恵会員を司会者に迎え、日本の高校生、大学生、市民、台湾の大学生・大学院生と、異なる対象に台湾を伝える4つの取り組みを事例報告とするプログラムを編成した。SNET 台湾の一員として高校生を中心に教育支援を行う筆者、「歴史総合パートナーズ」の一冊『あなたとともに知る台湾—近現代の歴史と社会—』（清水書院、2019年）の著者で、日本の大学で長年台湾について教えている胎中千鶴会員、九州大学台湾スタディーズ・プロジェクトで市民に向けて数々の魅力的なプログラムを提供してきた前原志保会員が日本の事例を報告し、国立成功大学歴史学系の教員としてフィールドワークを活用した先駆的な台湾史教育を実践している陳文松会員が台湾の事例を報告するというプログラムである。

当初、「台湾を教える」としていたタイトルは、「台湾を学び、教える—台湾研究の成果をいかに社会に還元するか—」に決定した。単に「台湾を教える」とすると、「どう教えるか？」という研究者間の閉じた話に見えてしまうが、研究者だけでなく、多様な立ち位置で台湾に関心を持つ人々を集め、相互作用の中で台湾への理解を深める方法をフラットに考えたいという思いを込めて「台湾を学び、教える」とした。

冒頭で述べたように、本シンポジウムは当初二部制を予定していたが、予想以上に多くの質問が第Ⅱ部で寄せられ、これらの質問に答えるため、急遽「延長戦」を撮影して YouTube で限定公開した。第Ⅰ部は、事前に録画した呉密察院長と4つの事例報告を Vimeo と YouTube でリアルタイム配信し、第Ⅱ部の質疑応答は、Cisco Webex Meetings でウェブ会議として行った。

本シンポジウムのねらいは学会と社会の対話にあったが、約250名から事前の参加申し込みが

あり、当日、第Ⅰ部には、Vimeo と YouTube 合わせて 300 を超える視聴があったため、本学会員以外に、少なからぬ非会員の参加があったと見ている。第Ⅰ部の動画は大会終了後も、SNET 台湾の YouTube チャンネルで引き続き公開されているが、2022 年 5 月までに 1,200 回以上の視聴がなされている。残念だったのは、当日、第Ⅱ部の参加が 150 名程度にとどまったことで、あるいは Vimeo/YouTube から Webex への移行に手間取った人がいたかもしれない。

学術大会の公開シンポジウムの YouTube 配信は、第 22 回学術大会で既に行われているが、事前収録とアーカイブ公開は初めての試みであり、今後の学会の活動に一つの選択肢を示したと言えるだろう。

第 2 節 SNET 台湾とは

学術と社会の対話を通じて台湾理解の深化を図ることを目指して企画された本シンポジウムの中で、筆者は、本シンポジウムの共催団体でもある SNET 台湾の活動を中心として、高校生に向けた実践を報告することになった。

SNET 台湾は、2018 年 9 月に赤松美和子、洪郁如、筆者が立ち上げた台湾研究者によるプラットフォームであり、当初は日本台湾修学旅行支援研究者ネットワークの名称で任意団体として活動、2021 年 11 月に特定非営利活動法人（NPO 法人）の認証を受けた。この際、正式名称を日本台湾教育支援研究者ネットワークに改称したが、SNET 台湾という略称は、3 年間の活動によって既に一定の認知を得たとの判断から、通称として継続使用することとした。発足以来、共同代表を務めてきた赤松、洪、筆者の 3 人が代表理事となり、若林正丈先生に引き続き顧問をお引き受けいただき、行政書士の若林哲平氏を新たに監事に迎えた。日本台湾学会をはじめ、台北駐日経済文化代表処、早稲田大学台湾研究所、一般財団法人台湾協会等の関係諸機関に様々な形で支援を受け、最近では、教育現場（高校）や旅行会社とも一過性ではない関係を構築している。

名称変更が示す通り、SNET 台湾は、NPO 法人化以降、働きかけの対象を拡大したが、当初のターゲットは高校生であった。日本の高校の台湾への修学旅行は年々増加し、公益財団法人修学旅行研究協会が毎年実施する「海外（国内）修学旅行・海外研修実施状況調査」によれば、2017 年の段階で 4 年連続シェア第 1 位、53,940 人と全体 3 割を占めるまでに成長していた³。しかし、高校の教科の中で台湾に触れる機会のごく限られており⁴、生徒はもちろん、引率する教員も台湾をよく知らないまま現地に赴き、背景を十分に汲むことなく植民地的近代の「壮麗な」文化遺産を目に焼き付け、現地の人のホスピタリティ（日本人にのみ向けられるものとは限らない）から「親日」のイメージを確認することに終始しているのではないかと懸念があった。多くの若者が「学びを修める」ために台湾を訪れる状況に期待感を持ちながら、同時に危うさを感じるという心理は、SNET 台湾を立ち上げた 3 人だけでなく、多くの台湾研究者が共有するところであり、2018 年 5 月の日本台湾学会第 20 回学術大会の公開シンポジウム「『新たな世代』の台湾研究」に登壇した赤松会員が後に SNET 台湾として具現化する構想を話したところ、多くの会員が賛意を示し、協力の意を示したのである。後述する SNET 台湾の活動を支えているのは、

何より日本台湾学会に属する台湾研究者の協力であり、SNET 台湾をプラットフォームとする支援活動の推進力となっている。また、SNET 台湾発足後、現場で台湾修学旅行に関わる高校関係者と繋がりが生まれる中で、上述の懸念が決定的外れでなく、台湾研究者による教育支援に意義があることが次第に明らかになってきた。授業で台湾に触れる機会の少なさと教員の理解不足が相まって、台湾修学旅行はマス・ツーリズム型の物見遊山、ないしは本シンポジウムの基調講演で呉密察院長が述べた「1990年代以降に形成された台湾に対するステレオタイプ」をなぞる旅に終始することも多い。現場で台湾への修学旅行ないし研修旅行を実施する高校教員、高校時代に修学旅行で台湾に行った大学生の話聞くにつけ、台湾研究者が関与することで、台湾修学旅行は「学びを修める」という原点に立ち返ることができるはずだという思いが深まっていった。そうした認識は依然十分な広がりを見ていないとしても、研究者がコミットすることで台湾への修学旅行ないし研修旅行の質が高まると考える高校関係者は確実に存在している。

第3節 台湾研究は教育支援から何を得るか

前節では、台湾研究者による教育支援が高校の現場にとってどのような意義を持つかを考えたが、本節では逆に、台湾研究が教育支援から何を得るかという問題を考えてみたい。地域研究の一分野としての台湾研究が大学生よりなお若い層に働きかけることについて、筆者は少なくとも2つの意義を見いだしている。

第一に、社会的責任の履行という意義である。「社会によって支えられる学術研究はその成果を積極的に社会に還元すべき」との考えが近年分野を超えて広がりを見せつつあるが、すべての分野がアウトリーチに取り組めるわけではない。1990年代末によく分野の専門学会を成立させた台湾研究は、当初社会に目を向ける余裕を持たなかった。しかし、先述の2018年の学会設立20周年シンポジウムが示すように、「新たな世代」（主に1990年代後半に大学生・大学院生として台湾の変化を目の当たりにして台湾研究に身を投じた者）が学会の重要な担い手に育った2010年代後半に至り、アウトリーチが分野の成熟期の課題として浮上してきたのである。いずれも学会ウェブサイトに掲載されている「日本台湾学会設立趣意書」（1997年）と「松田康博第11期理事長挨拶」（2019年）を読み比べると、トーンの相違に気がつくだろう。学会設立から長い間、台湾研究は自らが真つ当な学術分野であることの証明に努めてきたが、ここにきて研究成果の社会還元へ乗り出す余裕を得た。コロナ禍以前、約6万人の若者と台湾の（おそらくは最初の）接触の機会となっていた台湾修学旅行は、社会的責任を果たそうとする台湾研究にとって、成果を還元する受け皿として大きな可能性を示していたのである。

第二は、分野のサステナビリティの確保という意義である。「新しい世代」の多くは、上述のように1990年代後半に大学生・大学院生であった世代であり、台湾研究は学会設立当初の特色であった「若さ」を失いつつある。大学教員をはじめとする台湾研究者は、その職業柄、「若い世代」と言えば大学生・大学院生をイメージしがちだが、彼ら・彼女らは、学部・学科選択の時点で多かれ少なかれ学びの方向性が定まっている。他方、研究者が教育支援に携わることで高

校生と台湾の出逢いを実りあるものにすることができれば、その中から大学で台湾を学ぶ道を選ぶ者が現れる可能性が出てくる。つまり、大学生よりもなお若い世代に関わることは、台湾研究という分野にとって種まきに似た意味を持っている。将来、「台湾修学旅行世代」と言うべき一群が学会の屋台骨を支えることになるかもしれないのである。

第4節 SNET 台湾の活動

NPO 法人化以前と以後で順序に変動はあるが、SNET 台湾は、①台湾研究者の派遣、②学習教材及び関連書籍等の作成・編集、③ワークショップ・講座・イベント等の開催、④台湾への修学旅行・研修旅行の計画設計及び助言、⑤台湾の関係機関や研究者との連携の5項目を活動の柱としている。

発足当初は、台湾修学旅行を実施する学校への直接的支援、就中修学旅行の計画設計への助言と事前・事後学習講師派遣が活動の中心になると考えていたが、組織の存在が広く認知され、活動が軌道に乗る前に、コロナ禍によって台湾修学旅行の動きが止まり、SNET 台湾は、方向性の調整を余儀なくされた。そこで活動の場になったのが、インターネットである。「みんなの台湾修学旅行ナビ」(後述)として具現化するウェブサイトの制作は、当初より計画にあったが、YouTube にチャンネルを開設し、台湾を学ぶ動画コンテンツを配信することは、全くの想定外であった。以下、これまでの活動の概要を具体的に紹介したい。

1. 高校への台湾研究者の派遣

2019年5月17日に神奈川県立金沢総合高校に赤松、洪、筆者の3人が赴き、同年6月に修学旅行で台湾に行く約120名の生徒に事前指導を行ったことが、SNET 台湾にとって最初の講師派遣となった。同校では、先方から指定のあった「建造物」と「お茶」について講演を行ったほか、3つの教室に分かれ、生徒が事前に調べた内容をグループで発表、SNET 台湾の講師がそれにコメントをするという形式で計100分の指導が行われた⁵。また、同年12月には、滋賀県立膳所高校の依頼で、2年生の台湾修学旅行の事前学習及び人権学習の講師として、本学会の横田祥子会員を紹介した。横田会員は奇しくも同校の卒業生であり、双方にとって嬉しい出会いであったが、台湾の歴史的・文化的背景を説明しながら、台湾の視点から人権という普遍的なテーマを学ぶことで、台湾「を」学ぶだけでなく、台湾「から」学ぶということの重要性が改めて明確になった。

2020年度には、さらに多くの講演依頼があると期待していたが、コロナ禍によって台湾修学旅行の中止が相次いだ。しかし、SNET 台湾と高校の教育現場の繋がりが完全に断たれることはなく、逆にいくつかの学校との間で、一過性ではない継続的な関係が築かれつつある。一例を挙げると、SNET 台湾は都立八王子東高校と台湾の高雄高校との間の交流(双方が英文ニュースレターを作成し交換する)をサポートしており、2021年、22年と連続で赤松、洪、筆者がオンラインで講演を行った。同校の講演は、講師→生徒の一方向的なものではなく、事前にSNET 台湾の学習コンテンツ(後述する「台湾修学旅行アカデミー」等)を見て、質問を考えてもらい、

講師が寄せられた質問に回答、さらに議論を深めていくという双方向的な形式を採っている。2021年のオンライン講演に参加して着想を得た生徒が女性の政治参加に関する優れた論文を書き上げ、2回目のオンライン講演に再び参加して論文の内容を発表してくれるという嬉しい展開もあった。

SNET台湾の3人が直接講演をしたり、日本台湾学会に属する研究者を紹介したりするほか、日本で学ぶ台湾人留学生を紹介して日本の高校生との交流をサポートした例もある。中央大学杉並高校では、2022年2月、同校PBLの一環として80名の生徒とSNET台湾が紹介した4名の台湾人留学生が対面及びオンラインで交流を行った。同校の生徒は台湾研修旅行に行けない中で、台湾についてグループ学習に取り組んでいたが、日本で学ぶ留学生との交流を通じて台湾に対する関心がさらに高まったことが彼ら・彼女らの事後の感想から見て取れた。また、副次的効果として、留学生の話す流暢な日本語を聞き、外国語学習に対する意欲を高めた生徒もいたようだ⁶。

コロナ禍の中で縮小を余儀なくされたが、高校の教育現場への働きかけは一定の成果を上げており、一部の学校については、継続的な関係の中でより深い学びを実現できていると考えている。

2. みんなの台湾修学旅行ナビ

2020年12月、台湾研究者が作る教育志向の台湾旅行情報サイトとして、「みんなの台湾修学旅行ナビ」(<https://taiwan-shugakuryoko.jp/>)を公開した。サイト名の「みんなの」という言葉は、同サイトが修学旅行で台湾を訪れる高校生のみに限ったものではなく、台湾に関心を持つ全ての人に向けられたものであることを示している。開設当初には、約50名の台湾研究者による142スポットの記事が掲載されたが、翌年も記事の追加があり、現在は200を超えるスポットが紹介されている。

同サイトでは、エリア・テーマ・SDGsとの繋がりから全国各地のスポット（史跡だけでなく団体組織や定期的なイベント等も含む）を分類し、300字程度の概要、学びのポイント（300字×2-3点）、さらに学びを深めるための事前・事後指導及び現地学習のアイディア、参考資料、基本情報（所在地、関連ウェブサイト等）という形式で紹介している。スポットには、既に修学旅行で定番の行き先となっている所もあれば、広く知られていない所もあるが、いずれの場合も表層的な紹介にとどまることなく、研究者ならではの分析的・批判的視点を含む学びのポイント、充実した読書ガイドを含むものとして、一般の観光ガイド本とは一線を画している。また、「点」としてのスポットの紹介だけでなく、「人権」「歴史」「ジェンダー」「戦争」等、明確なテーマに沿って「線」として設計されたモデルコース（半日ないし1日の短いものと複数日にわたる長いものを含む）の提案もあり、SNET台湾のYouTubeチャンネルには、同サイトを上手に使うためのガイダンス動画も用意されている。

3. SNET台湾YouTubeチャンネル

順調に参加生徒を増やし続けてきた台湾修学旅行がコロナ禍で途絶え、研究者が現場に赴く教育支援のニーズが激減する中でSNET台湾が着目したのは、YouTubeを通じた動画コンテンツの

配信であった。中高生を視聴者として想定し、本質的な情報をわかりやすく、講義形式ながらカジュアルに伝える番組として「台湾修学旅行アカデミー」を立ち上げた。2020年8月23日に配信した第1回の講師は松田康博会員で、テーマは「台湾とは何か」。核心的な議題にいきなり切り込む形となったが、あくまでわかりやすく、しかし、本格的に台湾を学ぶ上で避けては通れない議論であった。同講義は日本だけでなく台湾でも好評をもって迎えられ、2022年5月までに9千回以上視聴されている。以後も、日本台湾学会が擁する各分野の台湾研究者が次々と講師として登場し、「台湾と国際社会」(福田円会員)、「台湾の教育」(筆者)、「台湾の選挙」(小笠原欣幸会員)、「台湾の経済」(川上桃子会員)、「建築物から知る台湾」(上水流久彦会員)、「台湾 Area Studies ～台南篇～」(大東和重会員)、「映画で知る台湾～青春恋愛映画篇～」(三澤真美恵会員)、「台湾のLGBTQ」(劉靈均会員)、「高校生の政治参加」(許仁碩会員)、「台湾の民間信仰～参拝・おみくじ篇～」(前野清太郎会員)、「台湾と砂糖～甘い砂糖のしょっぱい話～」(清水美里会員)と、配信が続いた。このほか、松葉隼会員、陳家豪会員が現場を取材した国家鉄道博物館特別編(全3回)もあり、台湾とそれを扱う学術研究の多様性を体現するラインナップとなっている。鉄道編を含む15回の総視聴回数は、2022年5月までに3万5千回を超えており、今後も新作の動画を配信する予定だ。また、2022年2月には、第1回～第10回と国家鉄道博物館特別編全3回を収録したDVDを制作し、教育現場や関係諸機関に無償配布を行っている。

SNET台湾YouTubeチャンネルのもう一つの柱は、台湾の博物館が制作した動画に解説と日本語の字幕をつけて紹介する「おうちで楽しもう台湾の博物館」で、台北駐日経済文化代表処台湾文化センターと共同で制作された。国立台湾博物館、国立故宫博物院、国家人權博物館、国立中正紀念堂、国立台湾史前文化博物館、国立台湾文学館、二二八国家紀念館、順益台湾原住民博物館、衛武宮国家芸術文化センター、国立台湾歴史博物館の全10回。総視聴回数は約1万7千回(2022年5月現在)であり、こちらは10回で一応の完結を見ている。

SNET台湾YouTubeチャンネルには、この他にも後述する台湾国家人權館特別展「わたしたちのくらしと人權」関連の動画、日本台湾学会第23回学術大会公開シンポジウム第I部の動画もあり、2022年度にも新たな動画企画を計画している。

4. その他の活動

上記の他にも、ワークショップ「台湾地域研究と修学旅行」(2019年10～12月、全3回、早稲田大学台湾研究所との共催)、学校及び旅行会社への助言、台湾の官公庁や地方自治体、社会教育機関との連携等、多岐にわたる活動をしてきたが、特筆すべきものとして、台湾の国家人權博物館、台北駐日経済文化代表処台湾文化センターとの共同で行った台湾国家人權館特別展「わたしたちのくらしと人權」がある。SNET台湾は展示品の監修からオープニングイベントの企画、台日人權作文コンテストの実施まで幅広い業務を担当したが、同特別展でその一端を紹介した「台湾の政治犯を救う会」には日本社会から多くの注目が集まり、『朝日新聞』(2021年10月18日夕刊)、『毎日新聞』(同年10月20日夕刊)、『東京新聞』(同年11月25日夕刊)等、数々の媒体で紹介された。同特別展の特設サイト (<https://snet-taiwan.jp/twhr/>) に展示の内容がアーカイブさ

れているほか、2022年2月には北海道札幌市で巡回展が開催された。

おわりに

2018年9月の発足以来、SNET台湾は、段階的に活動の幅を広げながら、様々な活動に取り組んできたが、それもひとえに台湾研究者と関係諸機関の惜しみない支援があればこそだと言える。今後に向けて、以下の三点を課題と考えている。

第一に、働きかけの対象の拡大である。上述のように、「みんなの台湾修学旅行ナビ」のサイト名にある「みんなの」という言葉には、SNET台湾のコンテンツが高校生に限らず、台湾に関心を持つ全ての人に向けられていることを示唆している。台湾研究にとって高校生への働きかけが特に大きな意味を持つことは既に述べたが、高校生への教育支援という原点を大事にしながら、世代を超えて楽しく台湾を学べるコンテンツを開発していきたいと考えている。

第二に、教育コンテンツの精緻化である。これまででも、サイトの使用者、動画の視聴者を思い浮かべながらコンテンツを制作してきたが、今後は、一方的な教材の提供に止まらず、ユーザーとの対話を通して学び合い、よりニーズに合ったコンテンツを作っていくたい。

第三に、台湾を学び、教えるためのプラットフォーム機能の強化である。SNET台湾は、多くの関連機関に支えられ、また異なるセクターと交流してきたが、多くは一对一の関係にとどまっている。今後はSNET台湾が結節点となり、台湾理解のための相互交流のネットワークを確立していきたい。

日本における台湾理解の深化、持続可能な日台関係の基盤づくりという目標に向け、台湾研究の仲間と手を携えて、新たな挑戦に向かっていければと思う。最後に、本シンポジウムの企画責任者として、ご協力いただいた全ての方に改めて御礼を申し上げたい。

注

- 1 松田康博「第11期理事長就任にあたって」『日本台湾学会ウェブサイト』 < <https://jats.gr.jp/president/2019.html> > 2022年4月10日アクセス。
- 2 松田康博「第12期理事長就任にあたって」『日本台湾学会ウェブサイト』 < <https://jats.gr.jp/president.html> > 2022年4月10日アクセス。
- 3 公益財団法人全国修学旅行研究協会のサイト『修学旅行ドットコム』の「調査・研究報告」のページ < <http://shugakuryoko.com/chosa.html> > に2003年度以来の同調査のデータがアーカイブされている。
- 4 赤松美和子「持続可能な日台友好を築くための台湾研究者のプラットフォーム SNET台湾」『nippon.com』 < <https://www.nippon.com/ja/japan-topics/g02100/> > 2022年5月5日アクセス。
- 5 山崎直也「SNET台湾が台湾修学旅行事前指導を実施」『台湾協会報』第777号（2019年6月15日）、第3面。
- 6 小泉尚子「第二学年・プロジェクト学習実践報告」『中央大学杉並高等学校紀要』第31号（2022年4月）、112-113頁。